

タイの都市における若者文化一考¹⁾
 —— バンコクにおける「パブ」²⁾の事例から ——

A Study about Youth Culture in Urban Area, Thailand:
 A Case Study about “Pab” in Bangkok

齋藤大輔*
 SAITO Daisuke

In this paper, I focus on the lifestyle of urban youth in Bangkok, especially going to “pab”. In the case of Thailand, the activity and place of nightlife of youth have been thought with the discourse under negative image and bad influence for youth. In the academic field, this discourse has been dominance; that is, “pab” is the breeding place for pre-marital sex, drug use and so on. Consequently, these places have been regulated or cracked down by the authority from 2003. However, we still see many youths at these areas in spite of government’s regulation for youth’s night life.

I recognize that it is not impossible to grasp and understand this activity in depth from this essentialist perspective. It is necessary to re-consider about this behavior. This is the main objective this paper. To achieve this objective, at first, I will examine the whole picture of “pab” in Thai society. And then, I will discuss a specific case about “pab”. In this paper, I will focus one area where is one of the most popular area among youth in Bangkok in 2000s.

1. はじめに

日中は渋滞が激しいバンコクにおいても、ほとんどの主要道路が問題なく通行可能となる時間帯である深夜でも、昼間と変化がないような渋滞を見せる区域が存在している。それは、バンコク都内のラチャダーピセーク通り、ラーマ9世通り、スクンビット通りソイ55とソイ71周辺である。そこでは、自家用車のみならず、客待ちのタクシーも一車線をすべて覆い尽くすように列をなしている状況である。これらのエリアに共通するものは、タイの若者たちの主要なナイトライフの場であることである。そこでは、大音量の音楽に

身をゆだね、酒を飲むタイ人の若者の姿を目にできる。これらのエリアの雑然とした雰囲気は、新年などといった特別のイベント時のみならず、毎週末、目にすることができる光景である。このような光景は、バンコクにおける若者のナイトライフの場が、若者のライフスタイルの一つとしてタイ都市部に確立されていることを示唆している。このような若者のナイトライフに関しては、欧米、日本、韓国などにおいては、いわゆる「クラブカルチャー」という枠組みで分析が進んでいるにもかかわらず、タイのケースにおいてはあまり進んでいないと言えよう。その背景として、このような若者の活動やナイトライフの場に対して、タ

*西南学院大学大学院博士課程

イ国内の言説は、総じて否定的な見解を持っており、「これらの施設が若者に与える影響」という視座からが中心であり、薬物使用や性交渉の温床といった言説で語られることがほとんどであるからである。つまり「正しいタイの若者像」というものが存在しており、「パブ」に集う若者の存在はその枠組みから逸脱しているという認識である。確かに、このようなナイトライフの場が、薬物問題や未成年者の性交渉を増長している側面は全く否定できないものの、このような本質主義的視座だけでは、若者たちがこれほどまでに、ナイトライフを消費する理由を説明することができず、そこに内在している様々な要素を捉えていくことができないと筆者は考えている。さらに、このような若者たちの行動は「ライフスタイルの消費」という観点からアプローチしていくことが可能であるが、このようなアプローチはこれまでにそれほど試みられてこなかった。その背景として、河森 [2002] が指摘しているように、社会領域における「消費主義社会化」に対して、研究の中でその議論が軽視されがちな傾向が、研究領域に内在していることが挙げられよう。

そこで本稿は、タイの都市における若者の「ライフスタイルの消費」という枠組みから、都市部の若者のナイトライフを捉えていく研究の一環として、まずは、タイにおける「パブ」という施設の全体像や概要を明らかにしたうえで、バンコクの一地区の「パブ」の事例を報告していくものである。

タイのナイトライフという点を念頭に置いた際、例えば、外国人観光客向けのゴーゴーバー、異性の接客が中心となるカラオケ、ショーを見るようなカフェといった施設もタイ社会における

ナイトライフという範疇に入ってくるが、タイ都市部における若者のナイトライフという観点から、これらのナイトライフの場は本稿の対象からは除外していきたい。ただ、これらの対象を除外しても、タイの都市部の若者のナイトライフには様々な酒類の場が存在しているが、本稿では特に「パブ」という場に注目して考察していきたい。この「パブ」という場に注目していく理由としては、まず現代のタイの都市部の若者の間における主流のナイトライフの場として認識され機能していること、そして、この「パブ」が、消費社会としてのタイ都市部を考察していく一つの視座となり得ると考えているためである。

2. タイ社会における「パブ」

(1) 「パブ」の概要

特にこの10年間のバンコクの若者のナイトライフということを念頭に置いた際に、「パブ」の存在は、もっともバンコクにおけるポピュラーな施設であると言えよう。一般的にタイの若者が利用し、思い起こす「パブ」とは、イギリスやアイルランドの「酒場」という認識のパブとは異なった類の施設である。

その違いとは、パブは、通常グラス単位での酒類の提供がなされ、踊るための音楽や生バンドの演奏がない一方で、「パブ」は、踊りができるような音楽を有しており、そして「パブ」は客の単位が基本的にはグループであり、そのグループごとにテーブルが割り振られ、酒もボトル単位で注文し、氷、水、ソーダやコーラといった「ミキサー」も併せて注文する形式になっているという点である。そのため、店内はカウンターと椅子が

中心の形態ではなく、テーブルと椅子（場合によってはソファー）が中心となっている。さらに大きな違いは、食事の提供がなされていることである。パブであれば、簡単なおつまみが中心になっているが、タイの「パブ」の場合は、主餐となるような料理も提供されることがほとんどである。要約すると、広義のタイの「パブ」とは、「料理を楽しむことができ、酒を飲んで、踊る」ための娯楽施設であると位置づけられる。

このような特徴から、タイの場合は一般的に若者のナイトライフの場として同義の施設である「ディスコ」³⁾との差異に関しても触れておく必要が出てくる。実際のところ、「パブ」とこれらの施設の間に関しては、前述の「パブ」とイギリス等のパブとの間のように明確な差異が存在していないのが事実である。もしかすると「パブ」のスタイルが流行し、「ディスコ」として変わってきたという認識が正確であるのかもしれない。それでも、「ディスコ」は「パブ」とは違ったものであるという認識があり、おおむねコミットメントが存在しているといえよう。それは、Chaiyanam [2002] や Ing-orn [2007] が同様の見解を示しているように、「パブ」にはクラブやディス

コにある踊るために特化しているスペース、いわゆるダンスフロアがないので、踊る場合は、集団に割り当てられた机を囲んだその場で踊る点である。クラブ・ディスコの内部にある机や椅子があくまでも踊り疲れて、一時的に休憩する為に使用されるのに対して、「パブ」の場合は基本的に集団に机と椅子が割り当てられている。それは、基本的にクラブやディスコが個人を単位にしていること、踊りが中心の場であることに対して、「パブ」の場合はあくまでも集団が基本の単位となっており、必ずしも、踊りという身体的行動が中心になっていないことを意味している。そのため、「パブ」では、音楽が流れ、踊り・飲酒中心である内部と、ソファーが用意され、比較的静かな環境で食事や飲酒を楽しむことのできるオープンエアの外部席が設置されている場所が多い。この点は、例えば日本のクラブの多くがビル内に入居しているのとは異なっている。

(2) 「パブ」の形成と背景

Chuaは、アジア諸国におけるライフスタイルと消費文化の諸事例を通じて、「新中間層の間における消費主義という新しいライフスタイルに対する欲望は、現代のアジアの経済発展からだけでなく、消費主義のグローバル規模の拡大から生じた現象であった」[Chua 2001: 2]と述べ、「過去30年間の東アジア・東南アジアの経済発展によって生み出された新中間層とブルジョアジーの出現に共通した消費の急速な拡大といういくつかの側面を検証すること、特定の財やサービスの消費の総体的な同質化はこれらの社会階層に「新中間層」という均一化されたアイデンティティを付与したと言えるであろう」[Chua 2001: 28]という見解を示

写真-1 一般的な「パブ」の飲酒のスタイル



し、現代都市となっている「新中間層」に焦点を当てた論説を提示している。

実際に「パブ」がタイ社会において見られるようになってきたのは1970年代半ばになってからのことであると指摘されており、バンコク中心部のサラシン通り一帯にこのような形態としての「パブ」が形成されたことに端を発しているとされている [Ing-orn 2007: 4]。

この1970年代という年代からは、タイの経済発展と都市中間層の存在が浮かび上がってくる。事実、タイ社会の中でこの社会階層がクローズアップされてくるのは1970年代からのことである。1950年代のタイは都市にいる少数の統治エリートと農村部のマジョリティからなる二階層社会であると論じられていたが、1960年代に始まる国家社会経済開発を最初に主導し、開発独裁体制を敷いたサリット首相は、「中間層を増やしていくことが、安定した国家建設と市民社会を作りあげる最良の方法である」と述べ、中間層が厚みを持った社会建設を図っていた [船津 2002]。このような都市中間層の定義に関しては、末廣が指摘しているように、職種・地位に基づく定義、学歴に基づく定義、そして所得水準と生活様式に基づく定義の三つの接近方法が存在しているが、その中でも、学歴に基づく定義から点から考察していくと、タイにおける高等教育の拡充は、1960年代後半から本格的に始まり、大学生の総数が大幅に増加していった [末廣 2003: 248-249]。これらの教育機関は、もちろんチェンマイやソンクララーといった地方都市にも設立されたものの、例えば1971年の私立大学令によって設立されたほとんどの私立大学はバンコクに設立されていった。

このようなプロセスは、都市における消費者の

増加を意味し、バンコクという都市に「消費社会」を出現させていると言えよう。このことが、バンコクにおける「パブ」を主要な若者のナイトライフとして成立せしめる条件となっている。

(3) グローカルな場としての「パブ」

Shiraishi は、アジアの「新中間層」とその消費文化の特徴に関して、「流用」「ハイブリッド化」という観点から考察しており、アジア地域における経済発展の結果の新中間層のライフスタイルに大きな影響を与えてきたと述べている。ただし、それはアジアという地域に一樣なものではなく、各地域・国家において差異が生じていることも合わせて指摘している。

例えば、日本の場合、西洋式の住居でありながら畳の部屋を持っており、アメリカの音楽と同時に日本の歌謡曲を消費していることなどを事例に挙げたうえで、その流用の「元」となっているのは、アメリカの消費文化であることを挙げている。日本と同様のプロセスは、韓国・台湾・香港・シンガポールの場合にも見られると論じている。一方、東南アジア諸国の場合はこの様相が異なる。東南アジア諸国の場合には、アメリカ、日本、香港、そしてシンガポールの中間層のライフスタイルの流用とハイブリッド化が大きな要素を占めていることを指摘している [Shiraishi 2003]。

事実、今日のバンコクには多くのショッピングモールが立ち並び、都市には数多くの文化商品が流入している状況が生じている。消費を通じた、若者のライフスタイルが形成されている一面を有している。そこには、現代のタイの若者のライフスタイルにも、タイという一国内の要素だけではなく、グローバル規模での要素が反映していると

言えよう。このようなグローバリゼーションの要素は、ナイトライフの場にも作用している。

例えば、2008年11月に出版された雑誌『ブルータストリップ』は、「今、東京のクリエイターが目指すクールな都市はバンコクです」というタイトルのもと、タイの主要な若者のナイトライフの場や、現在のタイのポピュラー音楽などの流行を特集記事として載せている[『ブルータストリップ』2008]。この記事ではさらに、「ますます多様化するバンコクのナイトライフ、それは5年後に東京を超えるエネルギーがある」[『ブルータストリップ』2008: 27]と評されていた。

このような記事が指し示すものは、このような流行に関して基本的な認識であった「先進国：先行、途上国：追従」という枠組みから脱却した、グローバリゼーションの一つの側面である「グローバルなフォーマット」にのっとった「共通の価値観を有した文化」がバンコクに立ちあがっていることを意味している。グローバリゼーションは、多様化を促す一方で「同質化」も同時進行しているプロセスということである⁴⁾。

しかしながら、「文化帝国主義論」に代表されるように、グローバリゼーションが「同質化」のみを、ローカル空間に生成させていることを意味してはいない。遠藤は、「クラブ空間」が音楽のみならず、ファッションなども含有した「スタイル」であるということを前提として、以下のように述べている。

第1に、クラブカルチャーはまさに現在グローバルに浸透しつつある文化であり、世界中のどこでも似通った「場」や「音楽」として現れる。第2に、同時にクラブカルチャーは、現実に具

体的に現れる「場」であり、「音楽」であるがゆえに、ローカルな体臭を必然的にまとうことになる。第3に、しかもクラブカルチャーは、さまざまな断片の集積として創出されるものであるがゆえに、「クラブ」は一種の「世界都市」性を帯びることになる[遠藤 2005: 279-280]。

このような見解は、グローバリゼーションの一面であるクラブカルチャーを正確にとらえていると思われる。今日のバンコクの状況を考えた際にも、上記の指摘を十分に応用できるものである。「パブ」もその一つであり、遠藤が指摘しているような「グローバル」と「ローカル」のハイブリッド性を有したものである側面を有しており、「ローカルの体臭」をまとった場である側面をも同時に有しているのである。それは、「パブ」における音楽形態に反映されている。基本的には、タイの「パブ」の多くが、タイのポピュラー音楽をバンドで演奏し、DJではラップなどの洋楽が中心となっている。洋楽に関しては、2000年代に入ってから、それまでの音楽ジャンルから、ほとんど全ての「パブ」においてラップ中心の選曲に変更してきた。この背景にあるのは、1990後半からの世界規模のマーケットでのこの音楽形態の流行であり、その場が、グローバルと連結している側面を有している。このような「パブ」の近年の傾向としては、「ストリング」⁵⁾と呼ばれるタイのポピュラー音楽のコピーの演奏とDJのプレイとの交互に流されるスタイルが中心となっている。この点から、「パブ」が一種のハイブリッド性を有したグローバルな場であると言えよう。

(4) 「パブ」とそのイメージ表象

本稿の最初で触れたように、タイ社会において、「パブ」という場は、「社会的」に悪影響を与える施設という認識が支配的であった。その理由としては、これらの施設が、薬物売買や使用、未成年者の性交渉の温床、若者間の暴力の場となっているという点からである。例えば、Chaiyanamはバンコクの「パブ」を利用する若者に関して、未成年者の「パブ」利用とタイ社会における性交渉の低年齢化の因果関係を、アンケート調査を元に実証している [Chaiyanam 2001]。事実、「パブ」のこのような側面は一定の事実でもあり、このような状況は、タイで生産されているラップ音楽の歌詞に表象されている。

イケメンじゃないし 学歴もない でも僕は女好き 拳手願います
 女の子を籠いっぱいストックしてる そのうえ酒好き 拳手願います
 隣のテーブルの女の子をこっそり見ていると立って遮る男がいた
 パブは閉店したけど帰りたくない 一人で寝るとよく眠れない
 美人でセクシー でもまだ彼氏がない
 こっそり私を見てるのは言わなくてもわかってる わたしが欲しくないの？
 今日私一人で来たの 彼氏に内緒で遊びに来たの
 パブは閉店したけどまだ眠くない 帰りに誘おうと彼女を待ってる
 [Joey Boy “Yok Muu Khun” より一部抜粋し、筆者が訳を当てたもの]

このようなコンテキストから、「パブ」の存在

は、しばしば「社会」に対する危険な存在として認識されている⁶⁾。このような「パブ」を含めて、タイ社会におけるナイトライフに関しては、2001年以降規制が強まった。この規制は、内務大臣ブラチャイ・ピブソンブーンが主導したもので、具体的な内容としては、営業地域の規制、営業時間の順守、そして夜12時以降のアルコールの販売禁止であり、ゴーゴーバーやマッサージパーラーといった性産業と同様に「パブ」もこのような規制の対象となった。

「パブ」に関しては、まず未成年者の入場と取り締まるために、IDのチェックが行われるようになった。2000年代初頭までは、未成年者も含めて、「パブ」に入場できていたものが、近年ではその取り締まりが明らかに厳しくなってきた⁷⁾。さらに、場所によっては、銃器や凶器の持ち込みを禁止するために、ボディチェックや金属探知機すら準備している場も存在している⁸⁾。これらの施設に関する営業時間の制限も、遵守されるようになり、以前であれば毎日朝方まで営業していた店舗も、基本的には午前2時あたりには営業を終了するようになっている。さらには、しばしば薬物使用のうわさが上がっていた「パブ」は廃業に追い込まれたりしてきた⁹⁾。

このように考察していくと、「パブ」は正統である文化とは別種の対抗文化、サブカルチャーという枠組みで見ることが可能であるかのように思われる。しかしながら、「パブ」に関しては、このような単純な見方ができないのが実情である。なぜならば、「パブ」が社会的にネガティブな存在としてみなされているのは事実であるものの、それ自体が、中央の権威に対して一種の対抗意識

を持ち合わせているとは考えにくく、利用している若者が対抗的な集合的アイデンティティを共有しているとは、思えないからである。むしろ、「パブ」を利用している人々は、社会的に主流となっている階層の人々という側面を有している。

ここでタイにおける他のポピュラー文化に目を向けてみると、1970年代の「プレーン・ブア・チャーウィット」や1990年代後半から2000年代前半にかけての「タイ・ラップ」といった、その時代の若者に人気があった音楽ジャンルに対しても「パブ」と同じように規制の対象となった。そもそも、若者の間にアンダーグラウンドのレベルから大きな支持を獲得していったが、いずれも、その当時の政府により、発売停止や場合によっては、告発・逮捕といった措置もとられたことがあった¹⁰⁾。しかしながら、双方とも商業化のプロセスをたどっていく中で、ポピュラー音楽の一ジャンルとして成立していくことになり、結果的に、ネガティブな点を含めたメディア表象がその音楽ジャンル自体の認知を高めていくことになった [Ubonrat: 2001、齋藤：2008a]。

このような側面は、ナイトライフに関しても例外ではなく、Thorntonがイギリスのクラブの事例において「場所が勝ち取られるということは、概して当該の社会集団が利益の上がるマーケットとして認知されたときである」 [Thornton 1995: 25] と述べているように、必ずしも「サブカルチャー」という非商業的な枠組みからのみでなく、商業化の下での形成されていることを認識しておく必要がある。そこで、次章で事例を考察していくことになるが、「パブ」が商業化された枠組みの中で消費されているという点を考慮に入れて、検証していきたい。

3. 消費対象としての「パブ」ーバンコク・トンロー地区を事例に¹¹⁾

(1) ステータスとしての「パブ」

これまで述べてきた、「パブ」の全体像から、具体的な事例の考察に移っていききたい。ここで取り上げるのは、スクンビット通りのソイ55と63である「トンロー・エカマイ地区」(以下トンロー地区)の事例を取り上げていく。以下に示すのは、バンコクにおける、主な「パブ」が集中しているエリアの一覧である。

この表からわかるように、「パブ」という施設が各エリアによって、その特徴をそれぞれ有していることが分かる。その中でもトンロー地区と似た形態の「パブ」が多いラチャダーピーセーク・ソイ4(以下ラチャダー)との比較から考察していきたい。

まず「パブ」で提供される酒類に関して、トンロー地区の場合は、輸入された酒しか置いていないのが通常である。それらは、「ジョニーウォーカー・レッド」「ジョニーウォーカー・ブラック」「シーバスリーガル」と言ったスコッチウイスキーが中心となっており、一本1,000バーツ以上の価格が設定されている。一方、ラチャダー周辺の「パブ」には、トンロー地区と同じような種類のウイスキーを置いているが、主流となっているのが「100 pipers」と言った輸入されているではあるが、価格帯がおよそ500から600バーツ程度のもので主流となっている。この酒類の価格に加えて、決定的に異なっているのが、「ミキサー」と呼ばれる氷、水、コーラの価格であり、トンロー地区の場合、水・コーラが350ml一本60バーツ、氷が小さなバケツ一杯が100バーツ程度である一方、

表-1 バンコクにおける「パブ」が集中しているエリアとその特徴

地区名	特徴
トンロー・エカマイ地区	バンコクの中でも最も人気のある地区であり、現在のパブのモデルを作ってきた地区である。この地区は、バンコクの目抜き通りの一つであるスクンビット通りのソイ55（ソイ・トンロー）とソイ63（ソイ・エカマイ）に点在している。店の規模としては、それほど大きくないものが大半である。音楽のスタイルとしては、基本的には、タイ・ポップの生演奏とDJのプレイが交互に繰り返される。
RCA (Royal City Avenue)	RCAとはバンコクの主要な通りである、ラーマ9世通りから入った通りの名称である。1990年代の後半から若者の主要なナイトスポットとなっており、おそらくタイ全土規模で最も有名なものである。この特徴としては、一軒ごとが比較的巨大な建物になっており、近年ではTAT（タイ国政府観光庁）のパンフレットやガイドブックにも記載されていることで、外国人観光客にも認知の高いエリアとなっている。したがって、音楽のスタイルも、店舗によっては、外国人（西洋人中心）に好まれるようなハウス等のジャンルの音楽を流している場も多くある。
ラチャダーピセーク通り	バンコクの地下鉄沿いに北部方面に延びるラチャダーピセーク通り沿いの「ラチャダーソイ4」と呼ばれる地区に特に小規模なパブが密集している。さらに大通り沿いに点在している。店舗としては、「ラチャダーソイ4」はトンロー・エカマイ地区と似たような建物であるが、ソイ4以外の地区の店舗はRCAにあるような比較的大規模なものになっている。音楽のスタイルも、小規模な店舗であればトンロー・エカマイと似たもので、大規模な店舗であれば、RCAと似たようなスタイルとなっている。このエリアでさらに特徴となっているのは、これらのパブと並行して、ショーなどを見せるタイプの店舗も立地していることである。
カオサン通り	バックパッカーの集まるエリアで、2000年代に入り、通り自体がタイ人の若者にも人気のスポットになった。それに平行して、既存の外国人向けクラブに加え、タイ人の若者向けのパブも多く建てられている。店舗自体は小規模なものが大多数を占めている。

出所：筆者作成

表-2 消費金額によるパブの分類（1バーツ＝約3円）

	名称	酒の種類・値段	客層	特徴
1	「ハイ・ソサエティ」向け「パブ」	「シーバスリーガル」「ジョニーウォーカー」といった外国産のウイスキーで一本あたり2000-2500バーツ	ハイ・ソサエティのタイ人や外国人	ドレスコードやエントランスフィの存在
2	ホール型「パブ」	一本あたり600-800バーツ	地方出身者のタイ人	ホール型の大規模な店舗で、ステージがあり、そこでショーが催される
3	一般の「パブ」	一本あたり400-500バーツ	学生 ホワイトカラー	小規模な店舗で、タイのヒット曲のバンド演奏が主流、利用者の服装のスタイルはラフな格好の若者が多い

出所：Chaiyanam [2002] を元に筆者作成

ラチャダーの場合は、概ねトンロー地区の半分程度の金額になる。

このような「パブ」における消費金額という側面に関しては、Chaiyanamが2000年代前半の状況を元に以下の三種類に区分している。

今日の状況を考えた際、このような単純な金額的な区分だけで「パブ」を分類していくことは、困難な状況が生じている。その理由として、トンロー地区の現状に関しては、Chaiyanamの区分では3の形態が今日の主流の形態となっており、消費金額と「パブ」の形態が単純化された相関関係にあるとは言えない状況が生じているからである。表の中にある、1や2の「パブ」はむしろ現在では、ステータスが高いという状況ではないからである。

したがって現在のバンコクにおいて立地環境が、「パブ」のステータス形成の要素の一つと見なして、考察を進めていきたい。「パブ」の周辺環境に関しては、ラチャダー周辺は、夜ともなると風俗店のネオンが輝くエリアとなっている、一方トンロー地区は、バンコクの中でも「高級住宅街」「ハイ・ソサエティ」なエリアとして認識されている。Marketeer誌では、“Thonglor Phenomenon”と題して、トンロー地区の特集を組んでいた。この特集においては、高層コンドミニアム、高級ショッピングセンター、国際的なレストランが広がるトンロー地区の光景ともに、「パブ」も特集されていた[Marketeer 2004]。同様に、New York Times紙でも、バンコクにおける若者文化に関する特集記事を2005年11月に掲載しているが、そこでも若者が集まる「ハイソ」な都市空間としての、トンロー地区を特記している[New York Times 2005]。つまり、「高級感あふれる」ト

ンローという都市空間の一角に「パブ」が完全に組み込まれていることを、この雑誌・新聞の特集から示唆できる。このような立地条件の差がそのまま消費金額に反映しており、エリア間における差を生じさせている一つの要因となっており、トンロー地区がラチャダー・ソイ4よりも、相対的にステータスが高いという評価を与えている。このような傾向は、実際に「パブ」を利用している若者の発言にも反映している。

(筆者) どうしてトンローを遊び場に利用しているの？

(回答者) だって、トンローという場所に立地している「パブ」がおしゃれだから。きれいだしね。

(筆者) もし、今行っている「パブ」がなくなったり、人気なくなったりしたら？

(回答者) そうであっても、またこの辺の「パブ」に行くだろうね。トンロー界限であれば集まってくる人たちも「ハイソ」だし、私の友達もこの辺でしか遊ばないしね。

[2009年9月に実施した現地調査におけるインタビューから]

この意見の背景には「トンロー」という空間が、タイの若者によって記号的に消費されている側面を有している。「パブ」という個別の場ではなく、それは立地環境自体が消費されている側面である。つまり、トンロー地区に立地している「パブ」という存在、およびその空間に立地している「パブ」に遊びに行くという行動が、一種のステータスとして消費されていることが見受けられる。

(2) トンロー地区における「パブ」と客層

このような「パブ」に関しては、立地環境を消費している記号的消費の側面を有しているが、さらに厳密に検討していくと、同じエリア内でも、流行している「パブ」とそうでない「パブ」が形成されている。しかしながら、常に一つの「パブ」が流行しているわけではない。そこからは、「パブ」と客層の問題が浮かび上がってくる。

例えば、ある「パブ」が開店した際には例えば、芸能人とか社会的ステータスを持った人々が集まり、そうするといわゆる「イケている」人たちが客の中心となるようになる。彼らの多くは、学生・ホワイトカラーを中心とした裕福な都市の社会層に属する層が中心である。このような評判は、メディアを介してというよりも、むしろ友人などのネットワークを通じて、口コミで広まることが多い。そのような口コミは、概してその社会階層内でまず広まることになる。さらに、その様な評判は、当然ながら他の社会階層がその「パブ」に来るようになる。それは得てして彼らより低い社会階層になるが、そうすると最初に頻繁に訪れていた客は、しだいに他の「パブ」に移るようになる。つまり、それまでの「常連」が他の「パブ」に移ることになり、結果として「パブ」の経営は厳しくなってくる。そうなってくると、この「パブ」は改装のため一旦閉店して、再度開店するようになる。トンロー地区ではこのプロセスを繰り返しているところがほとんどである。

このような「パブ」における客層維持の重要性は、ビジネスとしての「パブ」に必要な要素となっている。中には、同じ場所での改装だけにはとどまらないケースも存在する。

その一つが“Booze”の事例である。トンロー・

ソイ10における人気「パブ」の一つであった“Booze”は、2003年にオープンし、2008年4月に閉店することになった。それまで、“Booze”は、5年間で数回の改装を経ている。つまり、先に挙げたプロセスに沿っている「パブ」の一つである。しかしながら、最終的にオーナーは“Booze”を閉店して、数十メートル離れた同じソイ内に新しい“MUSE”という「パブ」をオープンさせた[The Nation 2008]。閉店する直前の2008年3月に、筆者はこの“Booze”を訪れる機会があったが、その時は“Booze”の5周年記念パーティーということもあってか、非常ににぎわっており、閉店に追い込まれるような状況には見えなかった。

この閉店と新規開店に関しては、「パブ」のオーナーのある戦略が存在している。それは以下の新聞記事の内容からうかがえる。

“Booze”は土地の賃貸契約が切れる2008年の4月3日に閉店した。オーナーのスワット氏は近隣の場所に移転する絶好の機会と捉え、顧客の質の底上げを図っていた。彼は“MUSE”という新しいパブレストランを開店させた。“Booze”

写真-2 5周年記念パーティーの際の“Booze”内部の様子



が、彼の格付けによるB+ランクの客層を対象にしていたのに対して、“MUSE”はB+からA-のランクの客層をターゲットとしている。彼は、ターゲットとしている客層は政治的運動に敏感でなく、不利でないと語っている。もうすぐ開店する“MUSE”は小売店、パブ、そして屋外・屋内のレストランとして特徴づけられる。彼は、現在の好ましくない政治的・経済的状況は多くのビジネスに関して不安であるものの、5つ星ホテルで働いていたシェフなどの彼のビジネスにおけるチームに全くもって自信を持っていると語っていた[*The Nation* 2008]。

この記事から明らかであるように、「パブ」のオーナーが客層に関して、非常に敏感であることが分かる。そして、もともとは土地の契約上の問題で、そのあった場所を移転することになるのであるが、それは、客層の向上のための契機と捉え、それが「パブ」の質の向上に繋がっていくという認識を示している。そして、新しく開店する「パブ」は元の「パブ」よりアップグレードされたものであり、より良い客層を狙っていることがわかる。

このような傾向は、タイの事例のみならず、イギリス・バーミンガムの事例においても報告されている。イギリスでは、1990年代に、高等教育の大規模な拡充が行われ、その結果、消費者としての都市部の若者が拡大し、ナイトライフの場の大規模な再編成がおこなわれてきたと指摘されている。このような状況の中に置いて、既存の「暗く・危険」なイメージから「明るく・安全」なイメージに変化させてきた。そのような再編成の結果生成したナイトライフの場はグローバルの要素

を取り込んだ、オシャレな空間な場として認識されており、既存のナイトライフの場から「主流」の座を転換させたと指摘されている[Chatterton and Hollands 2002; Hollands 2002]。

これと同じような傾向がトンロー地区における「パブ」の改装や移転と言ったプロセスにも適用されると考えている。その結果、安全なナイトライフの場としてのトンロー地区のイメージを形成しているのである。このような、トンロー地区の「パブ」が安全であるという認識はトンローの「パブ」の利用者の意見にも反映している。インタビューを行った際のある回答者の意見にはトンローで遊ぶ理由として、「ラチャダーには“low class”の人たちが集まっているから危険だから」というものがあった¹²⁾。つまり、トンロー地区の「パブが安全である」という根拠は、客層が良いことであり、それが安全という根拠になっている。

5. おわりに

本稿では、タイ社会における若者のナイトライフに関して、「パブ」という場に特化して、その全体像とバンコクのトンロー地区の事例を考察してきた。そこでは、タイ社会における「パブ」の全体的な特徴と「パブ」が記号的に消費されている一面を描き出すことができたと考えている。特に、トンロー地区の事例に関しては、若者たちの意見から、その個々の場よりも、むしろ、その立地している環境が選好の対象となっており、一種のステータスとしての「パブ」が形成されていることが窺えた。加えて、場を利用する客層と「パブ」の流行との関連性がトンロー地区の事例からは散見され、トンロー地区の「パブ」では、その

客層維持のために「差異化」が不断に行われていると考えられる。

このような場の価値を高めていくプロセスの中で、その場にふさわしくないと考えられる人々は、その場からは排除されていくことになる可能性がある。中にはトンローという空間で消費するだけの経済的な面を有しているのに関わらず、他の要素から、その場にふさわしくない「他者」として見なされているケースも考えられる。そこには、「我々」とは異なる社会階層に属している「他者」であるという認識が存在している点が内在しているのかもしれない¹³⁾。

ただし、この点に関しては、現段階では、バンコクのトンロー地区における傾向を描写しているに過ぎない。このような傾向がタイ社会にどの程度の広がりを持ったものであるのかという点に関しては、他のライフスタイルの消費の分析や、ナイトライフに関してもバンコク以外の都市やトンロー地区以外のエリアの分析など、包括的に研究を進めていく必要があると認識している。

【注】

- 1) 現地調査・資料収集の一部に関しては、2009年度アジア都市研究所若手研究者助成制度を受けて行った現地調査（2009年9月）の結果であり、記して謝意を表します。
- 2) 本稿におけるタイ都市部のナイトライフの場を指す際、「パブ」という括弧をつけた用語で統一して使用する。以後、特に断りがない場合、「パブ」という語は、タイ都市部における若者のナイトライフの場としてパブを指す。英語表記に関しても、“pab”というタイ語の英語表記を用いることにする。
- 3) タイ国内ではディスコは一般的に「ディスコテック」と呼ばれているが、日本における一般的な呼称である「ディスコ」を使用している。
- 4) もちろん、ここで示している「共通の価値観」の根拠となっているのは、グローバリゼーションが都市

と都市を連結するという点である。これには、「地方」が含まれていないということが同時に指摘される。岩渕は、アジア域内のメディア文化の交通の拡大が、その主要な消費者たる都市部の若者たちに、これまでにない文化交流のかたち、コスモポリタンの意識の醸成に寄与している一方で、その文化のつながりが、文化産業の生産物によるものであり、その大都市間に偏った「つながり」は、あまりにも多くの人々・地域を除外していることを指摘している[岩渕 2004]。この岩渕の指摘は、タイ社会にも適用されるものである。

- 5) タイのポピュラー音楽のジャンルは、ストリング、ルーク・タウン・モーラム、プレーン・プア・チーウィットに大別できる。以下に簡単にそのジャンルの特徴を記す
 - ・ストリング：1970年代以降に成立した、欧米の影響を受けたいわゆる「ポップミュージック」。
 - ・ルーク・タウン、モーラム：もともと「ルーク・タウン」と「モーラム」という別のジャンルが結びついたもの。「モーラム」とはタイ東北部の歌謡で、東北部の方言で歌われることが多い。
 - ・プレーン・プア・チーウィット：「人生のための歌」。1960年代の欧米の「プロテストソング」に大きな影響を受け、1970年代の民主化運動では若者の間に広まった。
- 6) 筆者がチュラロンコン大学に留学していた時、あるパブで友人たちといた際に、未成年者と薬物の取り締まりに警察官が「パブ」の中に入ってきたことがあった。その陣容は「異様」ともいうべきもので、警察の高官を先頭に、警察官多数、そしてテレビや新聞などのマスコミ関係者が続いて入ってきた。その次の日に、テレビのニュースなどで大々的に流れている姿を他の友人に見られていた。このような、「手入れ」は、成果が上がろうと無かろうと、次の日のマスコミに大きく流されるのが通例となっている。
- 7) 2000年代初頭までは、IDチェック自体がないことが多かった。そのため、2000年代初頭のパブには多くのティーンエージャーの姿が見られ、筆者の現在20代半ばの友人も、その時は未成年であるにも関わらず、「パブ」を利用することができ、現在のように厳しいチェックもなかったと語っていた。
- 8) このような背景には、パブにおける銃の発砲事件が起こっていることが挙げられる。代表的なものに、現下院議員のチャルム・ユンパルーンの二男が起

こした事件がある。

- 9) 営業時間に関しては、新年などの例外を除き午前2時までと規定されている。しかし、実際には、警察や政府と特別のコネを有している「パブ」はこの時間を過ぎてても、営業が実質的に黙認されていた。また薬物との関連に関しては、“Sparks”という「パブ」が薬物の販売で有名であったが、この数回の取り締まり強化によって、「パブ」自体が閉店に追い込まれた。
- 10) このような事例の中でも、もっとも典型的なものが、ダジム (Dajim) というラッパーが逮捕されたことである。ダジムもまた、アンダーグラウンドのレベルで活躍していたが、彼が2000年に、自主制作したアルバム“Hip Hop Underground”の中におさめられている一曲の歌詞の内容が、「社会的にふさわしくない」ということで、検閲され、結果的に彼は逮捕されてしまった。この事件は、タイ国内において大きく報道され、ラップミュージックの持つ「反社会性」ということが喧伝された。しかしながら、結果的には逆に「タイ・ラップミュージック」の存在が広く知れ渡ることになるのである【齋藤 2008b】。
- 11) バンコクの地名表記に関して、タイ語表記に正確に従うのであれば、「トングロー」「エーカマイ」「ラチャダーピセーク」というように表記されるように

なると考えられるが、一般的に耳にするタイ語では、必ずしも上記のような発音をしているとは限らない。そこで、本稿では、それぞれ「トンロー」「エカマイ」「ラチャダーピセーク」と実際に耳にする発音内容に近いもので表記している。

- 12) インタビュー自体はタイ語を用いて行った。インタビューから得られた発言は、タイ語から日本語に筆者が訳して記載しているが、この英語表記の部分だけは、インタビューの際に回答者がタイ語でなく英語を用いて、なおかつ強調して発言したため、そのまま low class と記載している。
- 13) このような意識を顕在化させる事例の一つが「英語」である。英語がうまく話すことができるかどうかということが、学歴、すなわち社会階層の表象となっている観がある。それは、英語でコミュニケーションができるかどうかという問題ではなく、いかにきれいな、正しい英語を話すか、ということである。その例が、筆者の友人が、ある外資系ホテルで働いているが、彼女らは、押し並べて大学卒業の学歴を有しており、当然ながらある程度の英語力を有している。そのような彼女らが、宿泊客とともにホテルを来訪する女性の英語力を嘲笑していた。そのような彼女らの英語を「借り物の奥さんの英語 (phasia mia chaw)」と評していたほどである。

【引用文献】

- 『ブルータストリップ』2008 (03)、マガジンハウス。
- Chaiyanam Nakrai 2001. *Ittiphon Khong Pub to Kan Mi Phetsanphan Khong Wairung : Sukusa Karani Wairung Thi Khoei Pai Chai Borikan Pub Yan Thanon RCA*, M.A. Thesis, Faculty of Political Science, Chulalongkorn University.
- Chatterton, Paul and Hollands, Robert 2002. “Theorising Urban Playscapes: Producing, Regulating and Consuming Youthful Nightlife City Spaces” *Urban Studies*, Vol.39, No. 1, pp.95-116.
- Chua, Beng-Huat 2000. *Consumption in Asia Lifestyles and Identities*, London and New York : Routledge.
- 遠藤薫 2005. 「グローバルゼーションと大衆文化変容－サブカルチャーに見る重層モラルコンフリクト－」『社会学評論』56 (2)、pp.273-291.
- 船津和代 2001. 「タイの中間層－都市学歴エリートの生成と社会意識」服部民雄・船津鶴代 (編) 『アジアにおける中間層の生成とその特質』アジア経済研究所、pp.201-234.
- Hollands, Robert 2002. “Division in the Dark: “Youth Cultures, Transitions and Segmented Consumption Spaces in the Night-time Economy” *Journal of Youth Studies*, Vol.5, No.2, pp.153-171.
- Ing-orn Donpanat 2008. *Kan Suesan Kap To Su Puea Sang Khwammai Khong Phuying Thiaw Klang Kuen*, M.A. Thesis, Faculty of Journalism and Mass Communication, Thammasart University.
- 岩淵功一 (編著) 2004. 「方法としての『トランス・アジア』」『越える文化、交錯する境界－トランス・アジアを翔るメディア文化』山川出版社、pp.3-24.
- 河森正人 2002. 「現代タイのメディア空間に見るアイデンティティの政治」『アジア太平洋論叢』第12号、pp.3-20.
- Marketeer, 2004 (6). 63 Krung Thep, Marketer Co. Ltd.

New York Times, November 20, 2005.

齋藤大輔 2008a. 「ローカルにおけるグローバル文化の展開－タイにおける事例より」片山隆裕（編）『アジアから観る、考える－文化人類学入門』ナカニシヤ出版、pp.185-198.

——— 2008b. 「グローバル化とローカルの場におけるポピュラー音楽の生産－タイ・ラップミュージックの事例から」大谷裕文（編）『文化のグローカリゼーションを読み解く』弦書房、132-151.

Shiraishi, Takashi 2004. "The Rise of New Urban Middle Classes in Southeast Asia What is its national and regional significance?" *RIETI Discussion Paper Series 04-E-11*, The Research Institute of Economy, Trade and Industry, Japan.

末廣昭 2003. 「タイの中間階層－民主化・高学歴化・消費社会化－」綾部恒雄、林行夫（編著）『タイを知るための60章』明石書店、245-249.

Ubonrat Sriyubasak 2004. "Popular Culture and Youth Consumption: Modernity, Identity, and Social Transformation" Koichi Iwabuchi, ed. *Feeling Asian Modernities Transnational Consumption of Japanese TV Dramas*. Hong Kong : Hong Kong University Press, pp.177-202.

The Nation, June 23, 2008.

Thornton, Sarah 1995. *Clubcultures : Music, Media and Subcultural Capital*. Cambridge : Polity Press.